# おわりにかえて
## ―バンドウイルカの「もも」―

歴史マニアが綴る「死」についての体験談、いかがでしたでしょうか。

私の場合は、思春期の頃から歴史が好きで、といっても歴史の謎を解明するとか、人が手をつけない歴史の穴を見つけ、その研究によって名を上げようとか、そういったことにはさらさら興味がなく、もっぱら興味の対象は「人」にありました。

傍目八目（おかめはちもく）ではありませんが、一人の人物にターゲットを絞り、文献をあさり、現地を歩き、心を向けていくと、その人の心の動きが手に取るように見えてくることがあります。そう思って心の向くままに歴史上の人物について調べ、付き合ってきたのですが、田池留吉という人物と出会うことで、「そうではなかった」と気付かされるようになりました。

それは、歴史上の人物の心が分かったのではなく、その人物によって、こちらの心が引きずり出されていたということだったのです。

自分は「歴史上の人物と向かい合っている」つもりでいましたが、実は「自分の心と向かい合っていた」という次第です。

こんなことを言ったからといって、「歴史を知らないと心が見えない」と言っているのではありません。むしろ歴史に関わることは、自分の心と向き合うには、回りくどくて効率の悪い方法で、過去世ごっこになったりする危険だってある訳です。

ただ僕の場合は、歴史が好きで、歴史上の人物のほうが、今生きている人間より身近に感じ、それが自分の心と向き合うことに繋がっていたというだけのことです。

この本では仏教に関わった人が多く出てきますが、僕の心の中を通りすぎっていった忘れられない人が、洋の東西を問わずたくさんいます。その人たちのことを縷々（るる）語っていると長くなりますので、最後の最後に、歴史上の人物ではなく、一頭のイルカのことを紹介させてください。

彼女については、ほかのところでも紹介したことがあるのですが、田池先生が亡くなる前に頼まれたことでもあり、忘れられない思い出となっています。